

広辞苑によれば、① 観察とは通常は現象に人為的干渉を加えないで、現象がどのようなものであるか、どのように生起するかという事実を確かめること、② 解析とは物事をこまかく解き開き、理論に基づいて研究すること、③ 分析とはある物事を分解して、それを成立させているもろもろの成分・要素・側面を明らかにすること、である。この説明によると、動作分析とは単に観察したものを成分的に小分けにして表現するのみではなく、一步踏み込んで原因分析的に取り組む積極的行為であると思われる。動作観察や動作解析とは異なる内容をもつ。臨床的推論(clinical reasoning)は単にいくつかの動作を観察した中から推論していくのではなく、いくつかの手続きによって可能な限り理由づけを明確にしていかなければならない。そのことによって、自ずと理学療法アプローチが見えてくるものと思われる。つまり、その目的は究極的に治療に結びつくものである。しかし、その結果は必ずしも還元主義的な運動療法の展開を意味するものではない。そのような視点で動作分析を捉え、臨床に生かせるように具体的に論じていただいた。

■理学療法士の Gestalt 視知覚による直観的動作分析—臨床意志決定能力の向上を目指して (今川忠男論文)

理学療法士の動作分析とは、単に観察した現象を成分的に小分けにして表現するだけでなく、踏み込んで原因解明と対策立案に取り組む積極的行為で、臨床意志決定過程に最も必要な能力である。分析方法の種類と分析の進め方を概観し、症例検討を行った。分析能力の基礎となる gestalt 視知覚と開発方法を発達神経学の最新知見を紹介し、言及した。最後に serendipity との出会いと paradigm の移行への挑戦を提言した。

■動作分析と運動連鎖—整形外科疾患をみるための方法について(福井 勉論文)

動作分析において、関節個々と身体全体のつながりを評価することは重要であるにもかかわらず、現在の運動学では欠けている部分ではないだろうか。本論では動作を力学的にとらえ、推論の可能性をなるべく除外する、股関節と動作、外力、関節モーメントを視覚化することの方法論とその重要性を述べ、さらに動作分析に重要と考えられる運動連鎖について述べた。

■疼痛と動作分析—特に腰痛症との関連から(荒木秀明, 他論文)

腰部機能障害は多岐にわたる姿勢および動作障害を招来する。しかし、従来の腰部機能障害に対する運動療法では「腰痛体操」として画一的に扱われ、動作障害に関する体幹および下肢筋群の安定化についての評価、治療は軽視されてきている。本稿では、① 静的姿勢の評価、② 脊柱の自動運動を中心とした形態学的評価、③ 歩行分析を中心とした動作分析の意義について簡潔に述べた。

■片麻痺患者の動作分析(芳澤昭仁, 他論文)

片麻痺患者の姿勢・動作について、極力、治療訓練につながるような動作分析の進め方となるよう努めた。開始肢位から順序立てて詳細に記載することにより、問題点が浮き彫りになるとは必ずしも思えない。姿勢や動作の特徴について、機器を用いずにセラピストの目と手で確認していくことが重要と考える。

また、できないことを見つけていくよりも、部分的に少しでもできることを見つけていくことが重要であり、それが治療訓練へとつながっていくものと考ええる。